



俳諧十家類題集

夏

5
1645
2



門利
種 1645
巻 2



佛諸十家類題集夏之部

○ 目錄

夏野	夏州	若の志	岩	藤	笋	九	蓼
柚の志	花抽	楓の實	藪椿	藤の實	夏木立	相の志	夏山
一ツ糸	杜若 ^五	卯の志 ^六	春卯茶	餘花	若	楓	
多糸 ^七	青糸 ^八	糸 ^リ	糸 ^リ	新樹	夏木立	相の志	
麦の植	植 ^三	牡丹 ^四	廿日竹	葵	葵	芥子	
加糸 ^二	加糸 ^二	葵 ^三	競馬	大神樂	麦	秋	
青嵐	灌佛	花御堂	佛生會	花摘	山王	祭	
四月	更衣	初給	給	白重	青簾		



合歡 <small>共</small>	早百合 <small>共</small>	田州取	初暉	燕玉	曹蒲湯	端午	夏夜	うは不	袋角	葛
泉月 <small>共</small>	南天 <small>共</small>	真菰	学喜入	五月雨 <small>共</small>	粽 <small>共</small>	曹蒲	明夜	うは不	蚊	宇老啼
くさ <small>共</small>	きり島	真菰	田植	五月雪	甲鎔	樗佩 <small>共</small>	一夏	さ <small>共</small>	初收帳	郭公 <small>共</small>
くさ <small>共</small>	花炭	萍	早苗 <small>共</small>	竹極	縹甲	根合	復書	大	安帳	閑鼓鳥
くさ <small>共</small>	紫陽花	蓆 <small>共</small>	早苗取	竹醉日	幟	曹蒲賣	復の日	崔鄭	蚊張 <small>共</small>	蝙蝠 <small>共</small>
くさ <small>共</small>	合歡	百合	早乙女	虎う雨	印地	花曹蒲	五月	鮎鱈	蜘蛛曲	飛蟻
くさ <small>共</small>								短夜 <small>共</small>	初鯉	

目一及

暑	夏越 <small>共</small>	冷酒 <small>共</small>	夏の海	繭	蟹	鴨の子	于氏	名草	枇杷実 <small>共</small>
夕 <small>共</small>	夏神楽	麦酒	六月	川鴉 <small>共</small>	鳴巢	青鴨 <small>共</small>	雨蛙	忍冬 <small>共</small>	青梅
洗 <small>共</small>	天満浄後	冷汁	氷室	照射	鴨巢	旭啼	母を <small>共</small>	茄子	若竹
土用干	芽搦	祇園會	氷室使	夜より	上切	鶉	蚊を	新麦	萱竹
虫于	施米	不二詣	一夜酒	夏川	鮎	鮎	とろろ	瓜の <small>共</small>	苺菜
虫拂	雷	御後 <small>共</small>	夏月 <small>共</small>	夏風	鮎	鮎	蝸牛 <small>共</small>	瓜守	紅の花

蠹	扇	麻頭巾 <small>平</small>	團	切水	復座敷
簞	竹婦人	菴枕	納涼 <small>里</small>	涼 <small>里</small>	風薰 <small>平</small>
露涼し	六月郭公	夏 <small>平</small>	汗拭	雨乞	旱
雲の峰	借水 <small>里</small>	河簀	于飯	水飯	冷麦
あけぬ <small>平六</small>	葛 <small>平</small>	振舞 <small>平</small>	氷 <small>平</small>	心 <small>平</small>	林檎
添 <small>平</small>	石竹	蓮 <small>里</small>	竹骨 <small>平</small>	澤 <small>平</small>	風車
海松	風蘭	麻	綿花	香薷散	真素丸 <small>平九</small>
瓜畑	夕顔	直顔 <small>平</small>	蝉	蝉衣	蝉の壳 <small>平</small>
空蝉	夏虫	蠅	蚕	仲麩	夏瘦
掛香 <small>平三</small>					

俳諧十家類題集夏之部

四月

八十坊 輯校

更衣

夏衣いささ風をさうきき
 針のちるふけくそ衣文
 誠後屋よりさぬきき衣之
 法解もさすの下さやし衣
 玉着るもたふさるもさ衣之
 境美の裏に日なりる衣
 夏衣いささ風をさうきき
 芭蕉
 希因
 其角
 嵐雪
 来山

骨こりゑんきとまきし衣之人
 文衣即後の人よりふ白し
 辻やよふ人の世の後の人
 文衣即後穿りしは化二人
 大無の廿十中やと後とえ
 結とせぬ森中田じり衣
 瘦穠の毛より綴凡たり衣
 清と付のま帯なること衣
 文衣結しむとさふこと結
 古給抱えのや川よとつりや
 芭蕉

夏一

穠をみりし控ふれとつとせが
 給出せられたる芥子のひとなる
 とつと給ふこと里の隅の隅
 大屋の結しむとつと給ふ
 つらと後より後よなるや黒本賣
 揚のこことかきしと給ふ
 めさそとねよせ給や給ふ
 祝とつと給ふとつと給ふ
 けつとつと給ふとつと給ふ
 めつとつと給ふとつと給ふ

嵐雪
 来山
 言水
 其角
 蕪村
 希因
 嵐雪
 希因
 嵐雪

青嵐

まき嵐とてやふとてや 苗のち

嵐雪

灌佛

灌佛や乳をさくもぬも比丘と

麦林

白堂

灌佛や於ま別寺の児

其角

花御堂

灌佛や小僧の指を沼の畑

希因

佛生會

七堂の各々一余るやふ中堂

麦林

花摘

麦飯や母りててては生會

其角

山王祭

色葉の唐ひくや佛生會

麦林

か茂信

ふはてや先行人を児の母

言水

か茂信

山法師のあはれきり

其角

か茂信

吹くそらの大平を吹り大吹部

沾徳

玄二

か茂祭

葵叶うもててしも牛の角

言水

葵摘

葵のくちまはりの車まで乃ち

蕪村

競馬

いぢやん叶か茂の俊擧今も日

嵐雪

太神系

を神系秋は流る所のまもは

言水

麦秋

葉は秋ふもてて一合るも秋無か

其角

麦秋

東の法師の麦の精風を懐りり重

其角

麦秋

る士郎てるをぬる麦ねてね

其角

麦秋

秋ましぬまきりもふりし馬

其角

麦秋

巻の巻るてり一年と巻るてり

其角

其角
 能化堂
 塔
 其角
 希因
 芭蕉
 蕪村
 其角
 希因
 芭蕉
 蕪村
 其角
 希因
 芭蕉
 蕪村

牡丹

其角
 希因
 芭蕉
 蕪村
 其角
 希因
 芭蕉
 蕪村

土膏てふふりきりぬり牡丹か
 古庭よりりもさるるちんちん
 續ふるけんのころや牡丹留
 眠る様それをもよあふらん
 をのころく人を消ぬし牡丹
 お丹ちりもまれまじく牡丹
 兼も〜のぬるの牡丹
 比車のか〜のぬるの牡丹
 ありて後傳ふらん牡丹
 山城のり〜のぬるの牡丹

嵐雪
 麦林
 来山
 蕪村

高土のには牡丹をせん
 不らんぬこちをぬこち行
 慶應のふらんや天の一ぬ
 さら〜もらんぬらんれ牡丹
 さら〜もらんぬらんれ牡丹
 さら〜もらんぬらんれ牡丹
 さら〜もらんぬらんれ牡丹
 さら〜もらんぬらんれ牡丹
 さら〜もらんぬらんれ牡丹
 さら〜もらんぬらんれ牡丹

芭蕉
 言水
 其角
 来山
 麦林

牡丹草

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

牡丹

嶺をこえて卯の春おむ御の舟
 川をゆりうの春らしきまある持
 うお花もあまの春のころの川
 卯の春や坊々山乃乃乃像
 嶺をこえてあまの春を帰る
 卯の春や風がけまも朝の香
 卯の花のほろも月之久た時
 卯の春乃まあま似てう征のま
 うの春よまもあまの春一
 うお花もあまの春のころの川
 芭蕉
 沾徳
 言水
 其角
 希因
 麦林
 希因
 其角

花卯本
餘花
若楓

春をこえてあまの春を帰る
 余花のころの春を帰る
 傷心のまもあまの春を帰る
 うお花もあまの春のころの川
 鞠壇まあまの春を帰る
 三平寺や日い年まあまの春を
 高低もあまの春を帰る
 村をこえてあまの春を帰る
 又まあまの春を帰る
 卯の花のほろも月之久た時
 卯の春乃まあま似てう征のま
 うの春よまもあまの春一
 うお花もあまの春のころの川
 嵐雪
 言水
 其角
 来山
 希因
 燕村
 沾徳
 素堂
 其角

其角	年々	山	其角
嵐雪	本州	希因	希因
東山	仙人の衣も	蕪村	蕪村
	経頂の峰	希因	希因
	意の持	蕪村	蕪村
	希因	蕪村	蕪村
	希因	蕪村	蕪村
	希因	蕪村	蕪村

青葉	青葉	青葉	青葉
新樹	新樹	新樹	新樹
其角	其角	其角	其角
嵐雪	嵐雪	嵐雪	嵐雪
希因	希因	希因	希因
蕪村	蕪村	蕪村	蕪村
希因	希因	希因	希因
蕪村	蕪村	蕪村	蕪村
希因	希因	希因	希因
蕪村	蕪村	蕪村	蕪村

相花	洞十結ゆりて新や友木之	其角
柚花	殿造り草くゆじ相のくく	其角
茶柚	巾の茶を仇名あこ碎 昔 後	沾德
檜實	行ふもくやえみ柚をまきひく	言水
藪椿	まてつんれくく思はらうまをぬ	蕪村
藤實	實はさくや一房残るる庵のま	素堂
長山	歳のき目を及ひくや 萩 桂	芭蕉
	藤り實を能得せんまの跡	沾德
	友山をよていり海しをまの江戸	其角
	かり山よ我き御巻るる女うね	其角

友八

菱野	友山やううしなをさるる若根人	蕪村
	おろくまを友み地を友友ねり	
	行くくまを友みけくたつねり	
	あつて叶て思ふくくくくねり	表山
其草	友叶やあまうれては月身	其角
	葉のうらまをな答るるのよまの叶	
	なつ叶や 檜をなんふ川通	
苔花	てをてて跡を思ふくく言のま	希因
岩藤	岩を友や けつこのくねるるは	麦林
笋	笋やよ山をくくの繪の 鞘	其角

一 幸のしるし 櫻のゆき 節の
 ほろろの月を 梅のたつら
 甲のまのまの まのまの 節の
 鳥城のまのまの まのまの
 下路のまのまの まのまの
 是のまのまの 月を 節の
 其のまのまの まのまの
 其のまのまの まのまの
 其のまのまの まのまの

十

贈懐

この華表 紙のまのまの 時を
 まのまの まのまの 節の
 其のまのまの まのまの 節の
 其のまのまの まのまの 節の
 其のまのまの まのまの 節の
 其のまのまの まのまの 節の
 其のまのまの まのまの 節の
 其のまのまの まのまの 節の
 其のまのまの まのまの 節の
 其のまのまの まのまの 節の
 其のまのまの まのまの 節の
 其のまのまの まのまの 節の

其角

おくしるゝ一二の擧るあ明しる 其角
 郭ら中へ入るゝのゝを成しるゝ
 草のたやしたゝ初きと隠るゝ
 ちりくをぬるゝのや時あ
 らゝゝ人のゝゝゝ下あし
 さゝゝゝ本をゝゝゝゝ
 院感うと味除ゝゝゝ時あ
 らゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 目の上ゝ目ゝゝゝゝゝゝ
 らゝゝ目ゝゝゝゝゝゝゝ
 其角

詠をすゝるゝゝゝゝゝゝ
 らゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 六阿陀陀ゝゝゝゝゝゝ
 東はゝゝゝゝゝゝゝゝ
 月清ゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ほゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 けゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 五福ゝゝゝゝゝゝゝゝ
 らゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

平野の
風景

西の山々を望むと、
ほのぼのとした光景が
目にうつり、心もなごむ。
田舎の静けさと、
自然の美しさを、
心ゆくまで味わう。
秋の風が、
頬を撫で、
心も涼しくなる。
この風景、
心癒す。

希因

来山

三十四

山々の風景を望むと、
ほのぼのとした光景が
目にうつり、心もなごむ。
田舎の静けさと、
自然の美しさを、
心ゆくまで味わう。
秋の風が、
頬を撫で、
心も涼しくなる。
この風景、
心癒す。

麦林

蝙蝠

只跡を定むもよるしんかんと
合次の尾をくねとやし宗店を
せつしんた槍の終り成やうんごる
ゆんさんて宗店をさちかうり
かんていし揚のえんも端を店を
宗店を寺ん白ま林をわいり
かんごる可もうく不もさうさか
明をぶさるを常やかんごる
蝙蝠の尾もさうりし高州
うんごるしんた槍のしんかんと

蕪村
其角
希因
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

五十六

飛 塚
袋 角
故 如

かまごりの物ちちちもねとるな
蝙蝠やし向ひの女店をうんか
飛塚とふや不之の終りし小あし
ふく投ようれ初さうし麻の角
故のきのちちむよさきし朝の雨
そのの故も松をこころ八さうま
為りし故さいほくさうさのさ
故をさうしや松さうしをこれ
故はよまのほくさうしはるり
さう毛の故よさうしはるり

蕪村
其角
芭蕉
沾徳
其角
其角
其角
其角
其角
其角

其角 其角
 来山 来山
 其角 其角
 言水 言水
 嵐雪 嵐雪
 其角 其角
 言水 言水
 来山 来山

其角 其角
 来山 来山
 其角 其角
 言水 言水
 嵐雪 嵐雪
 其角 其角
 言水 言水
 来山 来山

○五月

端午

一カアせんらや光の九

節

嵐雪

善高浦

まろく尾のきなくく高浦ま

らや光くく洗村山すれやらけり物

沾徳

うくや中そらのや光もまろくぬくも

来山

屋根ふれくまろくくろくろく

其角

我門をや光一る香くく

沾徳

携佩

携佩てらととまろくくくやま香

嵐雪

夏三十

根合

根合やゆ心よもろく

色

其角

高浦賣

泥足のまろくおくやらや光賣

麦林

高浦

高くまろく櫛のほくまらや光お

其角

垂のらや光もまろく流の福麟

嵐雪

高浦くくくくくくくくくく

其角

中つくくくくくくくくくく

其角

高

切ふえろくひもろくくくくく

其角

まろくくくくくくくくくく

其角

まろくくくくくくくくくく

其角

高浦湯

ほやしきくの浴よけうふ

来山

粽

新湯を沼	まじりて	きり	其角
朝湯より	似体	白く	言水
むく	や	粽	も
芦田	の	香	を
粽	入	片	を
ち	ま	た	ら
件	の	ち	り
而	ま	り	を
ち	ま	た	ら
み	も	た	ら

玄 廿一

甲飾
鎧甲
のり

甲飾	其角
鎧甲	来山
のり	沾徳
あ	ま
大	織
滑	る
本	り
た	ま
疮	癩
城	洞

其角

言水

卯化
葉玉
み月雨

乃ちうらむたふとせしは田舎化
あしひんよらうれを化のそと
まきまやたの巻れゆくさう
み月あふからぬらめや流田村
め月あまき柏の縁のすてと
目れたやまきくくみ月あえ
不ふ目さやうもまきし月雨
まきまやた清よらう流ありの
み月あふちてまきまきあぬ
隅よ葉化流きくもまきくみ月あ

来山
嵐雪
言水
芭蕉
言水
沾徳
其角
其角

三三

三三
まきまやた清よらう流ありの
み月あふちてまきまきあぬ
隅よ葉化流きくもまきくみ月あ
乃ちうらむたふとせしは田舎化
あしひんよらうれを化のそと
まきまやたの巻れゆくさう
み月あふからぬらめや流田村
め月あまき柏の縁のすてと
目れたやまきくくみ月あえ
不ふ目さやうもまきし月雨
まきまやた清よらう流ありの
み月あふちてまきまきあぬ
隅よ葉化流きくもまきくみ月あ

其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

三三

其角
 嵐雪
 希因
 其角
 蕪村
 其角

其角
 蕪村
 其角
 希因
 其角
 嵐雪

物 蟬

席 雨

竹 醉 日

竹 抽

鼻 月 言

早 暮

雪入

雪の音を入ら申しはほし

嵐雪

田植

風流のしるしをばりて田植を

芭蕉

田

田一たん植てまきる柿の那

其角

合

合羽をてまきる柿の那

其角

田植

田植をてまきる柿の那

其角

鎌

鎌はて帰る田の那

其角

早苗

早苗も我を日暮る那

芭蕉

早苗

早苗も我を日暮る那

芭蕉

早苗

早苗も我を日暮る那

芭蕉

早苗

早苗も我を日暮る那

芭蕉

其角

早苗

早苗も我を日暮る那

芭蕉

早乙女

早乙女の足は早の那

言水

早乙女

早乙女の足は早の那

言水

早乙女

早乙女の足は早の那

言水

早乙女

早乙女の足は早の那

言水

早乙女

早乙女の足は早の那

言水

早乙女

早乙女の足は早の那

言水

早乙女

早乙女の足は早の那

言水

早乙女

早乙女の足は早の那

言水

早乙女

早乙女の足は早の那

言水

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

薄

薄叶や今朝を向ふの春又咲

麦林

薄

薄草や大いなり花の咲く

希因

薄

薄や秋をくまふその心で居る

其角

薄谷

薄の花や金魚のくまふよとされ

其角

薄

薄のくまふやけりしれらけりしむ

蕪村

百合

薄のくまふ花のくまふのあめん

素堂

百合

百合のくまふ花のくまふのくまふ

希因

早百合

早百合のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

早百合

早百合のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

早百合

早百合のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

蕪村

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

麦林

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

其角

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

来山

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

南天

南天のくまふ花のくまふのくまふ

蕪村

石菖	ふりかみかみふりかみふりかみ 價さる水	其角
忍冬木	松のまきと忍冬木のまきをさるに	蕪村
茄子	鴨焼も夕也をさるぬ世界にま	其角
	せきを待たふの暮や 菜のひ細	希因
新麦	これにまを新まふくくならりり	嵐雪
瓜花	夕アも朝もははは瓜の花	芭蕉
	雷なり山泉も焼きて瓜の花	蕪村
	花瓜をしをかりさる路色の上	言水
	はらまよ鏡あやうらや瓜持系	其角
	浴衣さる瓜堂ふりし神の郷	

五廿七

瓜守	瓜守極の生ゆさるてよめ	
于瓜	于瓜やれらるる瓜の	
雨蛙	さる松のまきと樹のまき	芭蕉
螢	川のまきをさるる入るる	
	愚かきまきをさるる	
	披ふ瓜のまきとぬさるる	言水
	君さるる世のまきとりの相伝	其角
	年暮るるまきとりの相伝	
	宇治津田とりのまきとりの	
	けさるるまきとりのまきとりの	沾徳

蝸牛

高れとつりふらふとぬれを
坂を本やしそり又女の石を
夕べのしせとさひかく坂を
三軒屋ち坂人の坂中し
かやうして高しれ傍り
垣越えて高の遊り
あそびとよんさつり
養やうしの角やし
枇杷のさやし
年らぬ老の年や

嵐雪
希因
蕪村
来山
素堂
其角

雉 棠

堀牛 河のささるふ
そのたてや
又七ふ
籾倉中
あつたや
てしや
や重り
堀牛の
高も
内川や
雉の

其角
麦林
蕪村
嵐雪

鴨 栗

鴨の栗平しふ二の上く後宿の海

素堂

よ切

ひく汐の世中あき啼 落葉

言水

鳥 鷄

鳥常も鳥鷄も志ぬ雁の那

芭蕉

おいらるは成母毒うりさるる鳥鷄

其角

鳥鷄鳴くおまねけりり節

其角

冬を焼く鳥鷄を煮るお宿

其角

笑のふらふら鳥鷄のさきさきうらら

其角

黒鴨

黒鴨や鳥て身を帯 尾月友

沾徳

鴨の子

鴨の子や芦のさきさき 不羽摺

其角

青鷺

夕の霞や青鷺の 脛をうり

其角

三十一

鳩 啼

下やまの鳩 鳩のふく 純 名

其角

鴉

鴉ははまをて一里ハ 暮る 星の如

其角

はぬ鴉のふらふらよ 鳥の舞

其角

剣とて 鴉木 鴉川 言水

言水

後宿や 糞流る 鴉川 言水

其角

飯茶の 名を 鴉川 言水

其角

志の 鴉木 鴉をのうらる 魚 言水

其角

鴉亦 鴉く 鴉をのうらる 魚 言水

其角

西の 鴉く 鴉をのうらる 魚 言水

其角

鮎

鮎アサギは、魚の一種、

芭蕉

鮎アサギは、魚の一種、

沾徳

鮎アサギは、魚の一種、

希因

鮎アサギは、魚の一種、

蕪村

鮎アサギは、魚の一種、

芭蕉

鮎アサギは、魚の一種、

其角

鮎アサギは、魚の一種、

蕪村

鮎アサギは、魚の一種、

其角

鮎アサギは、魚の一種、

蕪村

鮎 鱗 川 狩

成長くたふふかきせり松嶺

言水

夏世四

照射

里川や精を連らうて傍らの

来山

おろろ

弓林子、秋とて魚のとりしる

蕪村

其川

雨後の月夜をよみおろろは後魚

来山

其の風

たつ川を流すを始とよまは川原

来山

其の風

風平に秋ぬつをよまは川の魚

来山

其の風

絲のよむとよまは川原

沾徳

小 絲

其の川とよまは川原

其角

其の風

竹しののえとて身あきとよまは

沾徳

其の風

竹しののえとて身あきとよまは

其角

其の風

竹しののえとて身あきとよまは

其角

夏衣

をひく川をさかしてうけ衣

嵐雪

夏月

を食らふ大地をさかしたる川衣

其角

夏月

月をさかしてさかしたる川衣

芭蕉

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

来山

嵐雪

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

夏月

夏の月をさかしてさかしたる川衣

其角

〇六月

氷室

六月の窓柵をさかして氷室

言水

後核

角帽又由さよ洞むれ不之詣
押船とさ成船成や一は後川
年も子羊の流るる川は後川
其後後川のちれさうのさう
はくさうとて後川とて海は後川
夕くさよなむらうとく山後川
る川とくく目の初めや一は後川
くはくの後息はとて其後
谷のさし背中流とや其後
おまのか成る後川とて其後

素堂
沾徳
素堂
其角
蕪村
嵐雪
蕪村
蕪村

三十七

其核

其神楽

天海後核

芥福

施米

雷

田者

大井川るくくのさく平耀とく
福多し神とくくすせと神楽
核とくくくくくく神楽
船とくくくくくくのさく
さくさくさくさくさくさく
後りく後核とくく後核
明るくく神明暗くく船のさく
さくさくも縦の木のさくさく
小女のさくさくさくさく
鳥を神のりさくさくのさく

言水
蕪村
其角
来山
言水
蕪村
其角
素堂
其角
其角

供うこの鞘の暑さや星の松
くまふくそ星の息を 増えくそ
赤星く 配くれのくそ 雲の配
やうふの木城く 雨の暑さ
山然り 熱の痛の けりさ かな
澤波のくそくそくそ 雨のくそ
雲けくそくそくそ 海の上
けりさくそくそ 雲のくそ
雲河や 飲さくそくそ 汗のくそ
汗流る衣の 脊のくそくそ

其角 其角 素堂 其角 嵐雪 希因 来山 其角

五州八

夕ま
夕ま 中 被り 柳子 けり 雲の
ふくふく やくやく 雲の けり
夕ま 中 中 被り 柳子 けり 雲の
雲の けり 雲の けり 雲の けり
夕ま 中 中 被り 柳子 けり 雲の
夕ま 中 中 被り 柳子 けり 雲の

其角 其角 素堂 其角 希因 来山 其角

蕪村

虫干

むしはむしを木の心で干す

其角

虫拂

むしはむしや甥の俵に束ねて干す
書紙干して竜と糸糸の糸干す
樟根又代をゆつり糸糸の糸干す
蓮葉干す

其角

扇

法のもむし干す
扇の裏紙を干す
扇の裏紙を干す

其角

扇

扇の裏紙を干す

其角

麻紙巾

麻紙巾の裏紙を干す

其角

麻紙巾

麻紙巾の裏紙を干す

其角

草

草を干す

其角

草

草を干す

其角

草

草を干す

其角

草

草を干す

其角

草

草を干す

其角

草

草を干す

其角

草

草を干す

其角

草

草を干す

其角

草

草を干す

其角

草

草を干す

其角

蒼うをををををの川さの涼なる
 大山の後らぬ縁をささく
 牛まのむさむの歯のやけ涼を
 涼しいの毒をほむらさるるん
 られやいなる物成すん下さるる
 川ささるる白くはぬるるさるる
 千ささるる回さるるさるる
 酒さるるさるるさるる
 島さるるの月おさるるさるる
 さるるさるるさるるさるる

其角

其角

麦林

其角

夏四三

船をさるるさるる
 大よおさけ大をさるる
 是不との三後さるる
 夕さるるさるる
 月出てさるるさるる
 さるるも眼のさるる
 さるるさるるさるる
 涼さるるさるる
 新合よ猶さるる
 さるるさるるさるる

嵐雪

来山

麦林

其角

来山

其角

来山

怪物

少くわたりと揮毫と船のさくらみ
嵐雪

まゝるあけりあはれとてとてとて
麦林

とてとてとてとてとてとてとて
芭蕉

ねねとてとてとてとてとてとて
其角

ねねとてとてとてとてとてとて
素堂

ねねとてとてとてとてとてとて
蕪村

ねねとてとてとてとてとてとて
言水

ねねとてとてとてとてとてとて
其角

ねねとてとてとてとてとてとて
蕪村

ねねとてとてとてとてとてとて
蕪村

風薫

六月郭公

草の

草の

蕪村

汗拭

汗のまゝいりよとてとてとて
其角

汗のまゝいりよとてとてとて
嵐雪

汗のまゝいりよとてとてとて
蕪村

汗のまゝいりよとてとてとて
蕪村

汗のまゝいりよとてとてとて
其角

汗のまゝいりよとてとてとて
其角

汗のまゝいりよとてとてとて
沾徳

汗のまゝいりよとてとてとて
其角

汗のまゝいりよとてとてとて
希因

汗のまゝいりよとてとてとて
希因

早

早

早

る外

せむらうやうのうらと麻の

麦林

蓮

る外りの堀と四所のる中一井

沾徳

蓮

魚屋のうらとむらさきとあま

素堂

をうらうらと風をうらをうらうら

繁字船沈よきりつたうらうら

我蓮橋のうらうらと

はうらうらと風をうらうら

つらうらうらと母のうらうら

はうらうらとうらうらと

うらうらと

己春のうらうらと蓮のうら

希因

言水

ふらうらうらとうらうらと

言水

ふらうらうらとうらうらと

言水

ふらうらうらとうらうらと

言水

ふらうらうらとうらうらと

言水

ふらうらうらとうらうらと

言水

ふらうらうらとうらうらと

言水

ふらうらうらとうらうらと

言水

ふらうらうらとうらうらと

言水

ふらうらうらとうらうらと

言水

ふらうらうらとうらうらと

希因

河骨

遠く川やいづれも遠く土の
涼しむの昔の川の連の
心運をきく人そと
運の昔やいづれも遠く
涼の心もいづれも遠く
川骨やいづれも遠く
川骨やいづれも遠く
川骨やいづれも遠く
川骨やいづれも遠く

表林
蕪村
其角
素堂
蕪村
素堂
蕪村
蕪村

夏四八

澤瀉

風車

海松

麻

風蘭

蕪村

おのころやいづれも遠く
牛のころやいづれも遠く
海松のころやいづれも遠く
蕪村のころやいづれも遠く
風車のころやいづれも遠く
海松のころやいづれも遠く
蕪村のころやいづれも遠く
蕪村のころやいづれも遠く
蕪村のころやいづれも遠く
蕪村のころやいづれも遠く

素堂
希因
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

蕪村

綿糸

くこの糸はまじりてきよなり似たりと云

素堂

香薷散

香しき薷を大に砕きて水に漬けて

其角

喜葉丸

和らぎ葉を水に漬けて水に漬けて

芭蕉

風蘭

柳の葉を水に漬けて水に漬けて

其角

竹青

竹の皮を水に漬けて水に漬けて

其角

竹青

竹の皮を水に漬けて水に漬けて

其角

竹青

竹の皮を水に漬けて水に漬けて

其角

竹青

竹の皮を水に漬けて水に漬けて

其角

風車

風の皮を水に漬けて水に漬けて

其角

風車

風の皮を水に漬けて水に漬けて

其角

其角

凡畑

母の月や又泣くはれと云ふ

其角

凡畑

母の月や又泣くはれと云ふ

其角

凡畑

母の月や又泣くはれと云ふ

其角

凡畑

母の月や又泣くはれと云ふ

其角

凡畑

母の月や又泣くはれと云ふ

其角

凡畑

母の月や又泣くはれと云ふ

其角

凡畑

母の月や又泣くはれと云ふ

其角

此れさう中しより所をかく梅雪

来山

沖 鱧

沖鱧よりけり中し落後

言水

衰 瘦

衰瘦よりけり中し小舎

其角

さう香

さう香よりけり中し

蕪村

かけ香よりけり中し

かき香よりけり中し

かき香よりけり中し

かき香よりけり中し

俳諧十家類題集夏之部終

